【デンマークでの合同研修の講義・訪問施設の概要】

１．4 月 23 日（火）9:00～12:00

講　義：「福祉国家を支えるシステム・考え方」

講　師：Ms. Momoyo T. Jørgensen （ノーフュンスホイスコーレ副校長）

報告者：坂田　猛

デンマークの福祉は国の事業で、医療、教育、介護・支援（公務員）の 3 分野が連帯している。医療分野では、デンマークはホームドクターによる完全予約の診察で、いきなり大学病院へはつながらない。患者の医療費ゼロでホームドクターの収入も国から支給される形を取る。福祉国家の財源は税金であり、そのパーセンテージは 44%前後だそうだ。しかも、消費税 25%がかかる。それだけ支払っていても、幸せ度のランキングではフィンランドに次ぐ 2 位だ。その要因は、税金の使い道が明確であり、国民が国を信頼しており、また国も国民の信頼に応えるべく、還元していることを目に見える形で提供している。常に良いバランスを保っているのだ。

教育に関しても幼稚園以下の時期から民主主義のプロセスを学ぶ仕組みがあり、子ども会議で自分の考えを確立できるように促されている。自分を大事にできるからこそ、隣人も大事にできる。人間の価値は公平であり、一人ひとり違ってそれを認められる関係性。その考えを学ぶ仕組みだと思った。

また、福祉に関わる公務員は絶対的な有資格制である。実習システムが充実しており、その期間が長く、学校、指導員の間で学生についての具体的で濃密なやり取りが行われる。指導員と学生は時間をかけて学んできた理論を実践につなげる作業を考えさせながら進めていく。そこには「Mynneskesyn（ミネスカシュー）人間感」という哲学を教えられるという。日本でいう「その人らしさ」や「寄り添う」をもっと深く、具体的に、長い時間軸で理解していく。その為、実習生といえども質が高い。その教育過程は国が取り決めており、学生給料を支払い、学習に集中できる環境を作り、効率的、合理的に税金が投入されている。

介護や支援についても充実していた。中でも少子化対策は必須の課題となっている。国力低下に即つながることを国が理解しているからだ。病院と地方自治体が繋がって子どものデータがデジタル化しており、そのサポートも充実したものだ。共働きに対応した預けられる場所の多様性、児童手当、父親の強制的な産休、子どもが病気の時に与えられる 1 日目の休暇の申請などがその代表である。

Momoyo 先生との授業

【デンマークでの合同研修の講義・訪問施設の概要】

全てがつながり、それぞれの分野の関係者が本当のプロ意識、誇りを持って動き、対話しながら同じ課題に向かって動き、国民も安心感を持って理解し合える。その連帯がこの国の福祉を支えているという事を、まざまざと思い知らされた。

2. 4 月 23 日（火）13:30～16:30
視察先：Frøbjerg-Orte Børnehave（保育・幼稚園）
対応者：Ms. Louise Pihl Andersen（リーダー）
報告者：今野　直子

案内は、リーダーの Louise さんと勤続 16 年の女性職員にしていただいた。デンマークは税金も高いことから夫婦共働きが当然で、専業主婦はほとんどおらず、保育・幼児教育のシステムは行き届いている。生後 6 か月から子どもが預けられるようになっていて、保育ママ・パパか保育所に預け、3 歳頃からは幼稚園へ移行。さらに、義務教育が始まる前の 0 年生クラスがあり、小学校入学となる。印象的だったのが『何歳から』というのが明確でない点。大体の目安はあるが、その子どもの発達や状況に合わせて所属する学年やクラスが選択でき、日本の年齢で画一的に区切るやり方とは異なっていた。保育にあたるのは主にペタゴー（教育や福祉を支える対人支援職）で、厳しい訓練期間を経て、高い専門性を有している。
日本で言う乳児クラスの活動を見学させていただいたが、決まったクラスの活動があるわけではなく、ペタゴーたちが目的を持って行う活動に、参加する子は参加して、参加しない子は思い思いの活動をするという、自由と自主性が尊重されていた。

意外だが、デンマーク発祥の玩具レゴは園内に少ししかなかった。当園も森の幼稚園とのことだが、デンマークの保育・幼稚園はほとんどが森に隣接していて、森の幼稚園でないところはないとのこと。森に出かける子どもたちは我々が訪問した時間より前に出発していたので、園付近には森に出かけなかった子どもたちが残っているとの説明だった。園庭なのか森が始まっているのか分からない程、自然と調和した園庭を子どもたちが縦横無尽に遊んでいた。ターザンロープや大きなティピー型テント、死んだ野生生物の変化が観察できる『死に箱』など自然を存分に遊びつくせる設定であった。これら遊具やおもちゃは職員・保護者・地域のアーティストが作成しているとの説明を受けた。

驚いたことが二つ。まず、0 歳代の乳児が外で昼寝をしている、と教えられ室外に出ると、屋根の下にたくさんのベビーカーが並んだ一角に案内された。ベビーカー置き場かと思っていると、中で昼寝をしているとのこと。我々が来るまでは職員は一人もおらず、ダウンのコートを着るような寒い日であった。探知機を設置しているので赤ちゃんが泣けば職員が見に来る、-10℃まで

は外でお昼寝をする、強い子になる、事故が起こった事はないとの説明。この園が特殊なのではなく、デンマークでは普通のことだと言う。うつ伏せ寝にならないようにベビーカーにはベルトが設置、虫よけの網、布団もあり、顔だけが出ている状況で大変驚いた。

二点目は、職員が体を傷めない工夫が行き届いていたこと。労働基準法で抱き上げたりしゃがむのは禁止され、排せつ、靴を履かせる、親へのお見送りの介助など全て専用の台や椅子があり、職員は子どもを抱き上げないで保育ができる。日本では腰痛は保育士の職業病だと言われているが、デンマークではそれを防ぐ手立て整っている。子どもには台に乗るように教えていて、子どもの行動を変容させてまで労働者を大事にしている姿勢が新鮮だった。

−10℃までは屋根の下のベビーカーでお昼寝

保育・幼稚園の外観

3．4 月 23 日（火）19:00～22:00

講　義：「世界一幸せな国デンマーク」

講　師：千葉　忠夫氏（バンクミケルセン記念財団理事長）

報告者：正垣　幸一郎

83 歳の講師が休憩なしで３時間ぶっ続けで行う講義を受けたのは初めてだ。そして対話形式で質問とダジャレだらけの講義で聴講者は刺激的な時間となった。

講義の冒頭は聴講生の自己紹介、講師の千葉先生の自己紹介から始まった。５０数年前に地球上に幸せな国はないかと探訪し見つけたのがデンマーク。片道切符で当時 26 万円をかかった。父の猛反対を受けたが、彼は「ドアは叩けば開かれる、叩かなければ開かれない」という精神でデンマークの門を叩いた。

日本とデンマークの違いという視点から講義は本格的に始まり、政治「女性の首相」、「男女格差の小さい国」、「ゆりかご前から墓場までの社会福祉国家」教育「義務教育」と「教育を受ける義務」の違い、「食料自給率」など真の民主主義とは何か！という問いから深く学んでいくことになった。

【デンマークでの合同研修の講義・訪問施設の概要】

真の民主主義を考える上で外せないのが「自由、平等、博愛（＋共生、連帯)」である。真の自由とは？平等とは？を対話しながら見つけていく。決して答えを教えない講義。そこから教育制度、就業、税金、福祉についてのお話を聞いた。中でも印象に残った言葉がいくつかある。
「幸せの国を作るのに知能指数は関係ない。」
「福祉という言葉は死語」
デンマークという国は愛国心が強いと感じた。それは国が国民を守るという強い意志を持っていたからだと感じる。

千葉先生の講義

第２次世界大戦の時ヒトラーに、デンマークの国王は「どうぞ侵略してください」と伝えた。それは国民の命、兵士の命を無駄にしないためだ。自分の国は自分で守る。その意志が代々受け継がれ今なお進化しているのだと思う。福祉の考え方が国のレベルで浸透していると福祉という言葉をあえて使う必要がないかもしれないと感じた。このまま報告書を書けばどんどん増えていきそうなのでこの辺りでやめておくことにする。日本を幸せな国にするために５６年もデンマークから発信し続けた一人の高齢者に感謝したいと思う。

4. 4 月 24 日（水）9:00～11:30
視察先：Marte Meo 特別指定施設 Gurli-Vibeke（認知症グループホーム）
対応者：Ms. Anne Mulberg Dahl（施設長）
報告者：正垣　幸一郎

視察させていただいた施設は認知症住居施設で Gurli-Vibeke,という女性の名前を使っている。入居者数は 26 名。1 フロア 13 人ずつ 2 フロアに分かれており、施設種別は認知症の方限定のグループホーム。
建物は昔の小学校を改築されて建てられ教室として使っていた部屋を居室にしている。建物の構造としては地上 3 階建て、地下 1 階となっており 1 階のテーマは庭、森。2 階は海がテーマになっている。3 階は職員のスペースになっている。

環境面ではさまざまな工夫がなされており、真っ白の壁ではなく、色がそのフロアの雰囲気を出すようになっている。また、施設の至る所に少人数、もしくは一人で過ごせる空間がある。

そこでは絵を描いたり、本を読んだりできるスペースやリラックスできるゆりかごをモチーフにしたリクライニングチェアで音楽が流れるものが設置されており居室でも使用可能だ。母親のお腹にいる感覚を感じることで鎮静する効果がある。また、一人用のソファーでビーズのようなものが入った袋で体を包み込むようなソファーもあり、抱きしめられ、安全、安心感を得るような効果がある。

床は消音効果があり、尿を拭き取りやすい素材になっている。音を吸収する素材で作られた森の絵が描かれたパーテーションを使い空間を有効活用している。騒音を無くすような工夫がなされている。外につながるドアのガラス面には本棚のシールが貼られており、ドアだと気づかないような作りになっている。

居室の位置付けはアパートメントの一室という考え方で、在宅のお一人の家という定義である。居室内には本や家族写真、昔使っていた柱時計やタペストリー、椅子などが持ち込まれている。たとえ本人が本を読むことができない状態になっていたとしても本人にとって意味のある物で囲まれていることが重要だ。また、天井にはリフト用レールが取り付けられている。デンマークでは法律で利用者を持ち上げることが禁止されている。

食堂兼アクティビティールームには天井にプロジェクターが設置されておりテーブルにプロジェクションマッピングが表示され、ゲームを行うことができるようになっている。手に振戦がある男性もそのゲームを楽しんでいた。

ソフト面では Marte Meo（マルテ・メオ）という手法の認定施設として指定されている。この手法の原点は子どもや精神障害者の方と教育者のやりとりをビデオで撮影し、そのビデオを家族やスタッフと一緒にディスカッションし双方の教育課題を自ら解決する力を身につけることを目的としている。この施設は認知症ケアにおいてもマルテ・メオを取り入れ特別指定施設として認定されている。マルテ・メオを入れることではスタッフの退職率が減り、求人も増え、スタッフのモチベーションが上がり、利用者の問題行動も落ち着くようになったようだ。マルテ・メオを中心に家族、スタッフが一体となりケアの方向性を共有できるのは魅力的だと感じた。このように考え方を共有することがデンマークでは当たり前で、それが重要となっている。

認知症住居施設（特別指定施設）

【デンマークでの合同研修の講義・訪問施設の概要】

5. 4 月 24 日（水）11:30 ～14:00

視察先：CSV/STU　Dockerslundsvej, Odense（青少年教育支援施設）

対応者：Mr. Claus Schonberg（施設長）

報告者：竹島　隆二

「STU」は“Saeright=スペシャルに”、“Tilrettelagt＝構成された”、“Undervising=教育”の略であり、「CTU」は”Center for Specialundervisning for Voksne”=成人特別支援教育センターで、主に発達障害系の診断を受けた 17 歳～27 歳の青少年を教育し社会へ自立させるためのサポートを行う自立支援の教育機関である。

ここを利用する青少年が持っている主な障害としては「ディスレクシア」、「ADHD・ADD」、「ASD」、「LD」、「不登校」、「強迫観念・強迫性障害」があげられる。そして、単独での障害というよりは様々な障害が重なり合い、さらにはそれが２次障害、３次障害を引き起こし複雑な状態となって社会に適応できていない青少年が多い。中には６つや７つの障害診断を受けている青少年もいる。

定員は６５名でそれぞれ個々の能力に合わせてサポートも違う。地域の工場やスーパーなど（現場）の企業に働きに出ていたり、職業訓練として施設内で作業を行ったり、授業を受けたりと様々なメニューがある。施設内の職業訓練には「木工作業訓練」、「鉄鋼作業訓練」、「自転車修理訓練」、「IT 関係訓練」、「美術・芸術系訓練」と分かれておりそれぞれの特性に合わせている。それぞれの特性を十分に配慮し、スタッフでアセスメントを行い社会へ自立するためのサポートを構築する。

また、地域の就労先と勤務時間や配慮事項、障害の程度等の伝達や調整を行ったり、新たに就労先を開拓するといった主に外部との調整機関・パイプ役として２人の専門スタッフいる。青少年の日々の就労状況、地域企業との密な連携をそのスタッフが密に窓口となり行うことにより、格段に社会自立初期でのつまずきを起こす割合が減った。

施設長のお話

施設長は Odense 市職員の Claus さんがマネジメントしており、スタッフは「教育ペタゴー」、「ペタゴーワーカー」、「心理士」、「ソーシャルワーカー」のライセンスがあり、青少年に対して

社会の一員としての認識を持ち、ネットワークを形成し、社会性を身に付け、余暇活動を充実させるといたことを教育の柱に置き「ソーシャルトレーニング」として日々実践している。

今回の視察訪問において感じたのはとにかく、子どもを自立させるためのあらゆるサポートを市や国、もっというと大人がきちんと責任をもって行っていることだ。日本の教育や支援の在り方について考えさせられる。

6. 4 月 25 日（木）9:00〜12:00

視察先：Bogense Skole（小学校・0 年生クラス）

対応者：Ms. Catja Kristiansen（副校長）

報告者：今野　直子

Bogense 市内にある、455 人の生徒を抱える小学校に見学させていただいた。2. で視察した保育・幼稚園 Frøbjerg-Orte Børnehave でも少し触れた、日本にはない、デンマーク独自のシステムとして「0 年生」があり、そのクラスの見学をした。義務教育ではあるが、小学校の勉強を始める前の準備の学年として、「就学前クラス」などとも呼ばれていて大体 6 歳位の子どもが所属する。2. で視察したような、自由な保育を経験して、すぐに机に座って勉強となると難しいので、こうした学年が用意されているようだ。必ずしも年齢で学年を区切らないデンマークでも、「0 年生」から学校生活が始まり、ほとんどが一緒に進級していくので、まだこのクラスに入るのが早いと園の先生が判断したら親と話して「0 年生」入りを遅らせることもあるようだ。

この学校の 0 年生クラスは 2 クラスあり、18 名と 19 名のクラスとのこと。我々が見学したのは 4 月の終わりで、デンマークは 8 月から新学年が始まるので、0 年生も終盤に来ているようだった。まず 0 年生クラスが体育をしているところから見学させていただいた。サーキットトレーニングのように体育館に数か所用意されているアクティビティーを数人一組になって、数分ごとに行っていた。音楽が止むと動きを止め、先生の合図で次のアクティビティーへと皆で移動していく。何度もやっている活動のようで、特に職員が指示を出さなくても皆よくわかって動いていた。職員の資格は、教員もいればペタゴーもいる。また教員・ペタゴー共になる為には長い実習期間を経る必要があり、実習生も複数クラスにいた。

室内で活動している 0 年生クラスも見学すると、デンマークのアルファベットの歌を歌っている最中だった。歌が終わると数人のグループ毎に先生に呼ばれて、呼ばれた順に手を洗って部屋に入っていく。これは全体指示と注意集中のセッションとのこと。午前ごはんの時間とのことで、皆が手を洗い終え席に着くと見学者である我々に一人ずつ自己紹介をしてごはんを食べ始めた。

皆黙々と食べていて、最初の 10 分間は静かに集中してごはんを食べる時間とのこと。子どもたちに注意集中の力をつけることを大事にしていることがうかがえた。また一人椅子に座って子どもたちと特に関わらない職員がいた。その職員は、気になる子どもの観察を集中していたとのこと。クラスに外国から来た子どもがいて、デンマーク語獲得に想定以上の時間がかかっていることを職員が気にして、親と話して、今後の対応を考えるために観察を行うことになったとのこと。

小学校・０年生クラス授業風景

小学校図書室

デンマーク語の授業を受けている 0 年生クラスの見学も行ったが、北欧の、自由で個を大事にする教育のイメージと違って、意外な程子どもたちはちゃんと席に座って、静かに職員の話を聞いていた。そのことを質問すると、小さいころにしっかりと規律を教え、あとは自由にさせている、と言われた。自主的にどうするかを考えさせる前に基本を教えて選択させる、個の責任と自主性を認めた教育方針だと感じた。

7. 4 月 25 日（木）13:30 ～16:00

視察先：Krisecenter Fyn（母子駆け込みシェルター）

対応者：Ms. Helle Bertram Olsen（Center leader）

報告者：竹島　隆二

この施設はパートナーや親族、元パートナー等から、不適切な関りをされた母子を守る施設である。不適切な関りの例としては、「パートナーから見下すようなコミュニケーションをとられる」、「女性として見下されたコミュニケーションをとられる」、「ジェラシーで縛られる」、「ストーカーまがいな事」といった事が挙げられ、自分のアイディンティティーが崩されるような関りのことである。また、一緒に保護された子どもは、子どもの安全性が確認できれば元の学校に通

うことも可能だし、近くにこの施設の趣旨を理解しているノンオフィシャルの状態で通うことができる学校もあるので、大抵はそこに通う。

こういった性質から、住所はもちろん非公開で、外観等の写真も撮影は禁止であった。ただ、危機を感じた母子がここを利用できるように相談窓口としての電話番号はインターネットで情報公開している。今回は、我々研修生だけでなく NFHS（ノンフュンスホイスコーレ学校）で、ももよさんのクラスの生徒も一緒に施設見学に参加した為、それぞれの自己紹介や、自分の興味がどのような部分にあるのかも伝え、対話形式で施設の概要について話して頂いた。

スタッフはリーダーが２人、ソーシャルワーカー２人、子どもペタゴー２人、臨床心理士１人、身体心理士（と呼ばれる身体の方に重きを置いた心理士）1 人、がいる。利用者に安全で安心な環境を用意し次のステップへ進めるサポートを行うためにそれぞれが、役割をもって、利用者に必要な時間を十分費やし、ケアしているとのこと。

また、現入居者のＡさんからも直接お話を聞かせてもらえる機会を設けてくれた。Ａさんは元パートナーよりストーカーの被害を受け、命の危機を感じた為、電話相談し利用することになった。ここに来るどの母親も当初は「私がシェルター？」、「まさか私が？」という意識を持っている。誰もが「HELP」を出すというのはとても勇気のいることだと言っている。そして、スタッフのサポートを受けて、３ステップを辿る。①は自分の現状にショックを受ける「ショック期」、②は現状を受け入れ未来に向けてポジティブに考えられる「ポジティブ期」、③は次の生活場所や仕事等、新たな生活の予定が立ちこのシェルターを出ていくことができる自分になったと思える「ワクワク期」だと。Ａさんはちょうど③のワクワク期で未来に希望を持っているとのこと。子どもは里親に預けており、そこで元気に暮らしていることも理解し、毎週末にはシェルターに子ども達が泊まりに来て一緒に過ごしているので心配はない。このシェルターの存在やスタッフにとても感謝していること話して頂いた。

社会的養護の現場で働く私から最後「HELP」の出しやすい社会環境とはどのような状態ですかと質問させて頂いた。Ａさんの今回の事例はストーカーだったので社会の問題というよりは私の気持ちの問題（本当は優しい。変わってくれる等の想い）だったとのこと。デンマークは「HELP」を出せるような情報自体は多くあると思うとのこと。今回の視察を受けて「HELP」を受け取らないといけない我々の姿勢やアンテナ、情報の提供について考えさせられる機会となった。

母子駆け込みシェルター施設にて

【デンマークでの合同研修の講義・訪問施設の概要】

8．4 月 26 日（金）9:00～12:00

講　義：「ソーシャルワーカーについて」

講　師：Mr. Jan Jørgensen(ノーフュンス地方自治体 児童・青少年ソーシャルワーカー)

報告者：坂田　猛

ヤン氏は北フュン島で児童と小児専門のソーシャルワーカーとして 25 年勤務しているその道のスペシャリストだ。デンマークの法律では 0 歳から 18 歳までの子供は健やかに生活を送らなければならないと定められている。その状況に反した場合、ヤン氏をはじめ、ノーフュンスコミューン（北フュン島地方自治体）の各部署で専門性が高く判断力に長けた 15 人の精鋭に通告がある。ヤン氏も含めこの 15 人がソーシャルワーカーだ。通告には 365 日 24 時間体制で対応している。通告の内容は様々だが、全てに全力で対応している。ケースが立ち上がると、ソーシャルワーカーをはじめ、心理士、ソーシャルワーカーのチームが基本で対応する。緊急性、重大さが増すと、専門の機関や警察との協力、弁護士、さらには、該当分野の議員、裁判官まで関係してくるという。正にこれがチームアプローチだ。その中でヤン氏のようなソーシャルワーカーの意見は大きな判断基準となっている。

また、情報収集と分析のためのマニュアル、基本 9 週間でまとめられなければならないアセスメントシート・報告書は、デジタル化されているが、書面になると 1 ケースの個人当たり 70 ページにわたるきめ細かさだ。それが兄弟を含む関係者分あるとのこと。
それぞれの家庭で殆どの子ども達が健やかに過ごしているが、貧困、中毒、虐待、様々な理由でごく一部のケースを強制措置として親元から離す決断も、ヤン氏の仕事となる。

ヤン氏の持つケースの内、割合として 32 件が最大の担当数で、その中で 4 件は強制措置の対応をせざるを得ないようだ。時にはガードマンも必要な時もあるそうだ。

ソーシャルワーカー Jan Jørgensen 氏と

強制措置後の、受け入れ先、子ども本人への対応も、未来を託す存在価値を十分に理解している国デンマークならではだ。里親の委託費は日本円にして 80 万から 200 万を月単位で援助する仕組みに耳を疑った。

自己決定を尊重し、個人を尊重する国民性の家庭内に介入していくのは、相当なストレスがあるのは想像に固くない。そんな彼の語りは優しく、温かく、物腰が柔らかい。ヤン氏ご本人の人間性、確固たる子どもを守り、その家庭を守るという信念があってこそ、25 年という長きに渡り活躍できたと推察された。ここでもまた、デンマークの現場第一とそれをバックアップする国との距離感の近さと、きめ細やかさを感じることができた。